

九月のテーマ

波に乗る



え・小島サエキチ

変化対応の 鍵はどこに？

近

年の再生可能エネルギーへの関心と相まって、技術革新による世の中の変化がいつそう加速しています。

自動車業界では、ハイブリッドカーや電気自動車の普及が進み、リッター三十キロを越えて走る低燃費の車が次々と登場しました。

エネルギーの分野では、シェール層から抽出する石油や天然ガス（シェールガス）が注目を集めています。また、ミドリムシからオイルを生産するバイオ燃料の研究や、微生物が有機物を分解する際に電気を生み出す原理を利用した「微生物燃料電池」の開発も進んでいます。

こうした社会の構造を変えるような技術革新や景気変動の波は、一定の周期で起きると、様々な経済学者が唱えています。

*

「世はまさに波動である、リズムである」。これは倫理運動の創始者・丸山敏雄の言葉です。さっと来て去る波、遅い波と、その波長に長短はあるものの、行きつ戻り

つ、浮びつ沈みつゴールに入る。

これが人生である、と著書の中で述べています（『純粹倫理原論』）。

世の中の動きすべてに、リズムがあるとするれば、変化に対応して、うまく時代の波に乗るには何が必要なのでしょうか。

近江屋ロープ株式会社という会社があります。創業は一八〇五年。網づくりを本業とし、明治以降は、林業や農業、鉱山の現場で使用する麻や綿の販売で栄えました。

戦後はビニールやナイロン製のロープの卸売り専門会社となり、成長を続けます。しかし、林業の衰退やバブル崩壊後の公共事業の減少に伴って、やがて経営危機に陥ってしまいます。

この時、社員の提案から起死回生の一手が生まれました。山が荒れ、急増したイノシシやシカから農産物の被害を防ぐため、害獣の侵入を防ぐネットの製造に乗り出したのです。

需要は思いのほか多く、特に、イノシシの侵入を防ぐネット「イノシッシ」は、ネーミングのイン

パクトもあり大ヒット。会社は息を吹き返したのです。

時代の変化に対応して経営悪化からの回復を成し遂げたのですが、その背景には、これまでの蓄積がありました。ロープに関するノウハウ、山や森との関わりという自社の強みがあったからこそ、時代の変化に対応できたのです。新たなビジネスも、本業のレールの延長線上にあったのです。

時代の変化に対応するために、過去のプライドや成功体験を捨てて臨むのは大切でしょう。

その一方で、捨ててはならないものがあります。それは、何の会社なのかという企業の「本（もと）」、本業であるコアの部分です。根無し草では、波に翻弄されて溺れてしまうでしょう。

変わらないわが社の「本」を見つめ、そこで働く人の心と、企業の「本」がしっかりとつながること。これが時代の波に対応するための秘訣ではないでしょうか。

参考資料

『週刊エコノミスト』8・26号（毎日新聞社）
『千年企業の大逆転』野村進著（文藝春秋）